



ポスト・サッチャー時代における保守党政治の変容と展開：地方から制約されるジョン・メイジャー政権の政治運営

安田, 英峻

(Degree)

博士（政治学）

(Date of Degree)

2024-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8957号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490182>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位請求論文審査結果報告

博士學位論文

論文内容の要旨及び審査結果の要旨

氏名 安田 英峻

学位の種類 博士（ 政治学 ）

学位授与の条件 神戸大学学位規程第5条1項該当

学位論文の題目

ポスト・サッチャー時代における保守党政治の変容と展開：地方から制約されるジョン・メイジャー政権の政治運営

審査委員	主査	教授	木村 幹
		教授	土佐 弘之
		教授	松並 潤
		准教授	河村 有介

論文内容の要旨

論文題目：ポスト・サッチャー時代における保守党政治の変容と展開：地方から制約されるジョン・メイジャー政権の政治運営

氏名： 安田 英峻

ポスト・サッチャー時代の保守党はどのような変化に直面しているのか。本稿は、その事例研究として、ジョン・メイジャー政権下の保守党政治（1990～1997）を検討するものである。

サッチャー時代のイギリス政治においては、「自由経済と強い国家」に基づく改革が数々断行されてきた。そして、本稿が検討するメイジャー政権もまた、「自由経済と強い国家」に基づく政治を徹底した政権だと広く理解されてきた。しかし、本稿はこうした前提を疑う立論を行っている。なぜなら、メイジャー政権からブレア政権に至る政治過程において、都市再生政策、ワークフェアの導入、公共部門における PFI の導入など、サッチャー時代では軽視された市場原理主義の抑制や中間団体の活性化を目的とした多くの政策措置が取られているためである。

本稿はこのような関心から、先行研究が充分注目してこなかったサッチャリズムからの転換という観点から、メイジャー政権を考察する。本研究が明らかにした点は以下の通りとなっている。

第Ⅰ部では、戦後保守党の理念的潮流とサッチャー時代の政治について整理した後、なぜ理念的刷新がメイジャー時代の保守党に求められるようになったのかを議論している。この分析では、1980年代以降、市民社会の荒廃が同国において深刻化しているにも拘らず、保守党が経済的自由主義に代わる思潮を打ち出せないという同一性の危機が理念的刷新を促す背景要因となっていたことを明らかにした。

第Ⅱ部では、メイジャー政権が欧州統合をめぐる党内紛争に苛まれた理由を明らかにするため、政党組織における中央・地方関係の観点から検討を行った。とりわけ、注目されるのが、保守党の党地方組織にあたる選挙区協会が果たす役割と下院議員との関係である。その結果、政策軸を基礎とした中央・地方間の結束強化が、党内秩序を乱す懐疑派議員の過剰代表を招いたという結論を得た。

第Ⅲ部では、狂牛病問題をめぐるメイジャー政権と農村コミュニティを代表する全国農業組合との関係について検討した。そして、サッチャー時代の政治において周縁化されていたサブナショナルなアクターが、このメイジャー時代において再発見されたことによって、政策展開の場面で大きな制約をもたらすようになった、と結論付けた。そのことは、組合による要請・態度に応じて、保守党もまた全国農業組合と整合した対応を取っていたことを意味している。本研究の第Ⅲ部では、地域利益を代表する全国農業組合と保守党政

権との提携強化に伴って、メイジャー政権の政策的自律性は喪失するに至ったことが明らかになった。

重要なのは、ポスト・サッチャー時代の保守党政治を考える際、その前史としてのメイジャー時代の考察なくして、中央・地方間のねじれ、あるいは何らかの政策をめぐる中央・地方間の一致を理解することは難しい事である。同様に、保守党政治史、またはイギリス政治の変化を考える際、分析の射程を地方レベルに拡張した分析が求められる。

論文審査結果の要旨

論文題目：ポスト・サッチャー時代における保守党政治の変容と展開：地方から制約されるジョン・メイジャー政権の政治運営

氏名： 安田 英峻

本稿は 1990 年代のイギリスにおけるメイジャー政権について分析したものである。メイジャー政権については、従来、サッチャー時代から続いた新自由主義政策の修正に失敗し、結果として選挙に敗北した政権として、否定的に評価される事が多かった。これに対して本稿は、メイジャー政権下において、サッチャー政権時代における負の遺産への対処が行われており、それが後の新たな保守党の路線へと繋がっていたのだ、と主張する。

この様なメイジャー政権期の対処として、本稿が注目するのは、同政権が施行した様々なレベルでの中央・地方関係の再構築である。本稿はこれを、それはサッチャー政権下における過度の中央集権化を是正しようとするものであった、とする。しかしながら、本稿は同時に、この中央・地方関係の再構築こそが、後にメイジャー政権による党内の統制を困難とし、また、農村部に基盤を有する圧力団体を過剰代表させる効果をも持ったのだ、とも述べる。つまり、サッチャー政権期の状況を是正しようとして行われた改革が、逆にメイジャー政権自身の基盤を掘り崩したのだ、というのが本稿の示すメイジャー政権期の図式である。

これらを説明するために、本稿の著者はメイジャー政権下での路線転換を主導した一人と考えられるウィレッツに着目してその著作から新たな理念を明らかにする（第一部）。ついで、保守党内の中央・地方関係に着目して、保守党本部・選挙区委員会・（各選挙区から選出されている）下院議員の三者の関係がどう変化しそれが EU との関係をめぐる問題にどう影響したかを明らかにする（第二部）。さらに狂牛病問題を取り上げて、地方を重視する方向に転じたことが、保守党内の対立と EU 内でのイギリスの孤立を助長したことを明らかにする（第三部）。

しかしながら、この様な本稿の説明には問題も多い。第一に、第一部で扱われる政権下での新たな理念がどの様にして現実の政策に繋がり、その政策が具体的にどの様な効果をもたらしたか、についての因果関係についてはほとんど分析がなされていない。また、第二部と第三部では、EU との関係をめぐる問題と狂牛病問題が取り上げられるが、何故にこの二つの問題がメイジャー政権下での改革とその結果を垣間見る上で重要なのか、という「ケースの位置づけ」は為されていない。

本稿においては、概念や説明の対象に関わる問題も残されている。例えば、中央・地方関係という言葉は、党中央と地方支部という意味と、ロンドンを中心とする都市部と農村部という二重の意味で使われており、結果、第二部以降の文章の理解を困難なものとなら

しめている。また、サッチャー政権期の「強い国家」政策の是正措置の結果として分析されるのは、国家ではなく、保守党の支持基盤の変化であり、ここでは「国家」と「支配政党」の二つが混同されながら議論が進んでいるように見える。

このような本稿の混乱の主たる原因は、そもそもが独立に公表された複数の論文を、一つの博士論文としてまとめようとした結果であり、またその統合方法が不十分であったからである。将来の書籍等の出版に際しては、大きく是正が必要とされる部分である。

以上の様な様々な欠陥を依然有する本稿であるが、個々の分析においては、保守党の内部文書や全国紙だけでなく地方紙も含めた中央・地方のメディア記事、更には政治家の伝記等多様な文献を利用して、未だ全容が明らかではないメイジャー政権期の改革努力について、具体的に明らかにしたことについては高く評価する事が出来る。

上記のような理由から、審査委員は一致して、本論文の著者である安田英峻氏が博士（政治学）の学位を授与されるのに十分な資格を有するものと認定するものである。

令和 6 年 2 月 9 日

審査委員	主査	教授	木村 幹
		教授	土佐 弘之
		教授	松並 潤
		准教授	河村 有介